

平成27年度(10月~12月)日程表		Schedule																														
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
2015 10	普通展示(浮世絵) 月百姿I (~11/1)																															
	普通展示(東洋陶磁) 緑釉陶器 (~12/6)																															
	普通展示(陶芸) 陶—生命の讃歌 (~2016/3/27)																															
	※1 普通展示(陶芸) 佐藤典克展—現在形の陶芸 萩大賞Ⅲ 大賞受賞者展 (10/6~2016/1/17)																															
	特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 よし原日本堤 (10/1~10/31)																															
11	茶室 井上雅之の茶室 初形より—花型 (~2016/3/27)																															
	特別展示 青磁のいま—受け継がれた技と美 南宋から現代まで (10/10~11/29)																															
	※1 普通展示(工芸) 山口県無形文化財の工芸—萩焼・赤間硯・金工— (~10/4)																															
	※2 普通展示(浮世絵) 月百姿II (11/3~12/6)																															
	普通展示(東洋陶磁) 緑釉陶器 (~12/6)																															
12	普通展示(陶芸) 陶—生命の讃歌 (~2016/3/27)																															
	普通展示(陶芸) 佐藤典克展—現在形の陶芸 萩大賞Ⅲ 大賞受賞者展 (~2016/1/17)																															
	特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 浅草田雨西の町詣 (11/1~11/29)																															
	茶室 井上雅之の茶室 初形より—花型 (~2016/3/27)																															
	特別展示 青磁のいま—受け継がれた技と美 南宋から現代まで (~11/29)																															
11/1~11/7 教育文化週間 普通展示観覧料無料																																
※2 普通展示(浮世絵) 月百姿I (~11/1)																																
普通展示(浮世絵) 月百姿II (~12/6)																																
普通展示(東洋陶磁) 緑釉陶器 (~12/6)																																
普通展示(陶芸) 陶—生命の讃歌 (~2016/3/27)																																
普通展示(陶芸) 佐藤典克展—現在形の陶芸 萩大賞Ⅲ 大賞受賞者展 (~2016/1/17)																																
特選鑑賞室 歌川広重 名所江戸百景 深川洲崎十万坪 (12/1~12/27)																																
茶室 井上雅之の茶室 初形より—花型 (~2016/3/27)																																
特別展示 シリーズ山東文物9 中華の服飾芸術 (12/12~2016/1/17)																																
																					1/1まで休館											

- ★イベント
- わたしの\*ちよる。—駒込み成形と上絵付け (青磁のいま展 関連イベント/参加無料/事前申込制)
- 内容 ●山口県PR本部長\*ちよる。の石膏型に磁土の泥漿を流し込んで型をとる駒込み成形と、素焼きの\*ちよる。の上絵付け体験。
- 日時 ●10月17日[土]・11月21日[土] ①10:00~11:30 ②13:30~15:00
- 定員 ●各回16名(受付先着順)
- 対象 ●小学生以上(ただし小学生は保護者の同伴が必要)
- 申込方法 ●参加者全員の氏名・年齢・代表者の住所・電話番号、参加希望日と時間(①②のいずれか)を明記の上、FAX(0838-24-2403)または電話(0838-24-2400)にて「わたしの\*ちよる。」係宛にてご応募ください。
- 秋のミュージアムコンサート (入場無料/当日先着順)
- 日時 ●11月3日[火・祝] 15:00~15:45
- 出演 ●木原 朋子 氏(箏) 杉江 慶子 氏(ピアノ)
- ※イベント詳細は美術館ホームページをご覧ください。
- 記念講演会 (聴講無料/当日受付先着順)
- 日時 ●12月12日[土] 13:30~15:00
- 講師 ●李博 氏(山東博物館書画部館員)
- 演題 ●明清服飾のはなやぎ—彩と繡のコスモロジー(中華の服飾芸術展 関連イベント)
- 場所 ●講座室(座席数84席)
- ▲アーティストトーク (出陣作家による作品解説/青磁のいま展関連イベント)
- 日時 ●11月1日[日] 13:00~15:00
- 解説 ●「中野月白盗について」 福島 善三 氏
- ギャラリー・ツアー (担当学芸員による特別展示作品解説)
- 「青磁のいま—受け継がれた技と美 南宋から現代まで」
- 日時 ●10月18日[日]・25日[日]、11月15日[日]・22日[日] 11:00~12:00
- 「シリーズ山東文物9 中華の服飾芸術」
- 日時 ●会期中の日曜日(ただし、12月13日は除く) 11:00~12:00
- ギャラリー・トーク (担当学芸員による普通展示作品解説)
- いずれも11:00~(30分程度)
- 10月24日[土] 月百姿I
- 11月14日[土] 陶—生命の讃歌
- 11月28日[土] 月百姿II
- 12月26日[土] 月百姿III
- ※アーティストトーク、ギャラリー・ツアー、ギャラリー・トークへのご参加には観覧券が必要です。

■交通アクセス

- 【新山口駅から】
- 防長バスまたは中国JRバスで萩明倫センターまたは萩バスセンター下車。萩明倫センターから徒歩約5分。萩バスセンターから徒歩約12分。
- 【山口宇部空港から】[萩・石見空港から]
- 萩近鉄タクシー(乗合タクシー)約70分。(利用前日までに要予約)
  - JR山陰本線
  - JR萩駅から萩循環線ありバス(西回り)約30分。
  - JR東萩駅からタクシー約7分。
  - JR玉江駅から徒歩約20分。
- 【自動車】
- [中国自動車道]美祿東JCT経由、「小郡萩道路」給油ICから約20分。
  - [山陰自動車道]三見ICから約10分、国道191号沿い。



山口県立萩美術館・浦上記念館 Hagi Urugami Museum 〒758-0074 山口県萩市平安古町586-1 TEL0838-24-2400 FAX0838-24-2401 URL http://www.hum.pref.yamaguchi.lg.jp/

季刊「萩」平成27年10月15日通巻第77号 ●発行/山口県立萩美術館・浦上記念館 ●山口県萩市平安古町586-1

# H A G I 萩

AUTUMN ISSUE 2015

77

題字は吉田松陰筆跡



ふくしませんぞう 福島善三 なかの げっぽくじ かんもんはち 《中野月白盗鈿文鉢》(部分) 2012年

青磁のいま—受け継がれた技と美 南宋から現代まで

会期:平成27年(2015)10月10日[土]~11月29日[日]

休館日:月曜日(ただし、10月12日、10月26日、11月9日、11月23日は開館)

HAGI URAGAMI MUSEUM

# 福島善三の中野月白瓷匏文鉢

—「青磁のいま」展の開催に寄せて

青磁は光を宿すやきものです。しかしながら、その耀きは釉表をさ走る閃光の眩さとしてではなく、たつぷりと施された厚い釉層に潜むほのかな照りとしての光明で、しかもそのやわらかな明るみは、光線の注がれる側から遠く離れた、もっとも翳りの濃い暗所にすらさやかな煌めきを留めているのです。青磁の器は、光の明暗という要素を造形として巧みに取り込んだ立体表現と言い換えてもよいでしょう。

青磁色の光彩を放つ青磁は、いまから二千年ほど前に始まった後漢時代の後期に完成されたと考えられています。以後中国各地で発展を遂げて陶磁生産の主流となりました。その端正な器形に被せられた美しい釉調は中世日本の貴人たちに大いに魅了して、唐末の秘色青磁に始まり、北宋と南宋の両王朝下に精造された陶胎の官窯精品や龍泉窯の砧青磁、南宋末から元の天竜寺青磁、明中期の七官青磁にいたる中国陶磁の輸入を促したのです。

鉄を着色剤とする釉薬を掛けて還元炎で焼成する青磁には、グリーンニッシュ（緑色系）とブルーイッシュ（青色系）の釉色があり、さらに後者には半透明で深みのある奥行きをみせる釉調と乳濁して淡く明るい釉調のものがあります。11世紀末から12世紀初頃の北宋時代に中国北部で産み出され、「雨過天晴（青）」つまり雨上がり直後のまだ潤いある大気を通して仰ぎ見た晴天のような青く澄んだ釉色のために天青色と形容された汝窯の器と、これにやや遅れて始まったと思われる温雅なラベンダー（藤）色の鈎窯器は、ともに宮廷の需要に応じて製造されたものですが、それぞれブルーイッシュ青磁の典型と考えられています。とりわけ鈎器の滑らかな釉肌は青磁の美質の一つとして長らく賞翫されてきました。

最盛期だった北宋の後期から金・元の時代に製造された鈎窯の器には、汝窯器とほぼ同等の彩度で天青と形容

された藤色の乳濁釉のほか、それが比較的濃い天藍や、藤色が天青よりもさらに薄い月白があります。月白という名辞は、清かな月光を思わせる青みのかかった（ブルーイッシュな）明るい乳白色のことで、現在開催中の「青磁のいま」展に出品されている、福島善三さん（1959年生まれ）の〈中野月白瓷〉シリーズは、この鈎窯器の釉調と肌合いの美質を産地伝統の素材を用いて表現したユニークな創作陶芸です。

「中野」とは、東南部が大分県と接する福岡県東峰村の小石原皿山地区にある字の一つです。緑豊かな自然に抱かれたこの静かな村は、現在も約50軒の窯元による陶器生産が主な産業です。江戸初期以来の作陶の歴史を刻む小石原皿山の中野はその中心で、そこで採れる中野粘土が小石原焼の主原土として使われてきました。

鋭く切れのあるアウトラインに轆轤さばきの巧手がうかがえる、《中野月白瓷匏文鉢》（表紙、catno. III-32）は、鉄分の多いその中野粘土を精製した素地土が、口縁端部や腰部の稜線、そして底部にも赤黒い土色として表され、無貫入の釉面の明るくやわらかな釉肌と響き合せて、広々とした見込みを持つ器の印象を引き締まったものとしています。また、見込みに施された波紋のように見える文様は、月白瓷の釉上に和紙の型紙を貼りつけてやや失透性の月白瓷釉を薄く吹きかけ焼き付けて表したもので、小石原焼伝統の装飾技法の飛匏をイメージしたものです。

福島さんが天和2年（1682）に開窯した伝統窯「ちがいわ」の跡継ぎとなるべく作陶生活に入った1983年は、まだ小石原焼に民陶ブームの勢いが盛んだった頃でした。しかし自己の感性をストレートに表現するため、歪みをもよとした当時の主流には敢えて乗らず、産地固有の素材である中野粘土をはじめ、とも土に藁灰や木灰を加えた釉薬を改良しながら、洗練されたアウトラインで魅せる器体の造形

をひたすら追究したそうです。そのための技術的な裏付けを、萩をはじめ江津、備前、瀬戸、益子などの産地の窯元を巡った経験と幼時より父から学んだ轆轤成形の手技に据え、中野で採れた素地土の繊細で温和な特質を引き出されたすために、器として成り立つミニマルなかたちを心懸けて強く締めるように立ち上げる手法で独自の作風を築いてきました。

しかし、技術が達者なだけでは求めるシャープなかたちは得られない。福島さんは自分が立ち上げようとするかたちのイメージと素地土の性質との融合に腐心したようです。そもそも陶芸素材とは、自然界そのままの生の素材に、表現のために適切な処理を施して造形的な資質を高めたものです。中野粘土や赤谷長石など地元で採れる鉱物の成分を分析・研究し、それらを轆轤によるのびやかな立ち上げに適するよう、粒子の細かさまでも調整しました。

「口から3cm」が見せる鋭い造形に、器総体の洗練された美感が全うすることを知るこの作家は、口縁端部の成形に最も意を尽くすといえます。かたちの立ち上げはまさに自己と素材とのせめぎ合いなのでしょう。

一方で、自身の仕事が小石原焼らしくないと揶揄されたこともあったそうです。長い時間のうちに営まれる技法や素材の扱い方には、その風土で育まれた経験と知恵が蓄積されており、時々々のモードではそれらのごく一部が採り上げられるに過ぎないのではないのでしょうか。時代精神を反映する一つのスタイルが結実するには、そういった隠れた固有性を再発見し、自己のものとして取り込み活かす創造意欲の飛躍が必要なのです。月白瓷をはじめ福島さんが挑み続ける造形表現はそんな産地の伝統の深みを感じさせてくれます。

（石崎泰之／当館学芸専門監兼学芸課長）



福島善三 《中野月白瓷匏文鉢》 2012年

## アーティスト・トーク

《中野月白瓷について》※要観覧券・申込不要

講師 ○ 福島善三氏（本展出品作家）  
日時 ○ 11月1日 [日] 13:00～15:00  
会場 ○ 講座室（84席 当日受付先着順）、本館2階展示室

## 展覧会のご案内

青磁のいま

—受け継がれた技と美 南宋から現代まで

会期 ○ 平成27年（2015）10月10日 [土]～11月29日 [日]  
休館日 ○ 月曜日  
（ただし、10月12日、10月26日、11月9日、11月23日は開館）

開館時間 ○ 9:00～17:00（入場は16:30まで）

観覧料 ○ 一般：1,000（800）円  
70歳以上・学生：800（600）円  
※（ ）は前売りおよび20名以上の団体料金。  
※18歳以下の方および高等学校・中等教育学校・特別支援学校の生徒は無料。  
※前売券は、ローソンチケット（Lコード 61338）、セブンチケットおよび県内各プレイガイドでお求めになれます。

主催 ○ 青磁のいま展実行委員会  
（山口県立萩美術館・浦上記念館、読売新聞社、KRY 山口放送、NHK プラネット中国）

後援 ○ 山口県教育委員会、萩市

絢爛豪華

# 中華の服飾芸術展 の見どころ

会期 ● (2015) 平成27年 12月12日 土 ~ (2016) 平成28年 1月17日 日

色鮮やかな色彩を放つ袍(大型の上着の一種、中国語ではパオ)、艶やかな魅力を醸す裙(スカート、中国語ではチュン)。中華の悠久の歴史の中で育まれた服飾文化は、明清代になって一層に華やかさを増し、一つの到達点にたどり着いたと言えます。

当館で開催される特別展示「シリーズ山東文物9 中華の服飾芸術」(会期：平成27年(2015)12月12日～平成28年(2016)1月17日)では、明清代を中心とした、一級文物を含む50点余りの中華の服飾作品を展示します。普段日本で展示される機会の少ない作品も出品予定で、大変見ごたえのある展覧会です。

このエッセイでは、服飾の歴史等にも触れながら、展覧会の見どころの一部について紹介します。

人間の身体を保護するために作られた服飾は、時が進むにつれ、着用者を美しく着飾ったり身分を表したりする

役割も担うようになり、時に規制の対象ともなりました。

服飾で身体を着飾ることは古今東西を問わず行われていますが、近代以前には特に資産に余裕のある上流階級の間で流行しました。真っ赤な生地と、当時モチーフとして使用することが禁止されていた闘牛を刺繍した華やかな明代の袍はその代表的なものと言えます(図1)。当時の上流階級の人々の、着飾ることへの情熱が垣間見えてくるようです。

服飾は着用者の身分を表す役割も担っています。日本では官位を帽子の色で区別した「冠位十二階」などが有名ですが、明朝では官僚の官位を袍に施した補子(パッチワーク、中国語ではブーツ)のモチーフで表現するようになり(図3)、清朝にも引き継がれました。また、明代には袍に直接補子を縫い付けていましたが、清代になると補子を縫い付けた補服(または補掛)と呼ばれる裾の短い上着を、袍の上から羽織るようになりました(図2)。



図1 二級文物 闘牛袍  
明時代  
丈 120cm  
肩両袖通長 213cm



図2 三級文物 鶴鵲補服 清時代 丈 122cm 肩両袖通長 180cm



図3  
鶴鵲補服 部分

中華の特に漢民族と呼ばれた人々は袍のようなゆったりとした衣服一枚で身体全体を覆う場合と、上衣とは別に下半身に裙と呼ばれるスカートなどを着用する場合があります。前者のワンピースタイプを長衣、後者のツーピースタイプを上衣下裳と言います。図は女性用の裙で、白色の生地に草花文が刺繍されており、素朴ながらもどこか力強さを感じます(図4)。

服飾とは衣類だけではなく、靴や装飾品など人間を着飾るすべてを含めた言葉です。展覧会では、衣類以外にも多数の服飾作品を出品予定ですが、今回はその中から靴を取り上げます。

「足元を見る」と言うように、足元はその人の置かれている立場や状況を如実に表します。用途や風習が異なると、使用される靴の形状も異なってきます。

つい近代まで中華、特に中原の女性は足が小さいほど美しいという「纏足」と呼ばれる文化が存在しました。幼少の頃から足が大きくなるのを防ぐために、つま先部分が下を向いている弓鞋(中国語ではゴンシエ)と呼ばれる



図4 一級文物 白羅縵花裙  
明時代  
丈 88cm 腰幅 60cm



図5 緑縵花弓鞋  
清時代  
底長 12.5cm



図6 三級文物 如意雲文黃朝靴  
清時代  
高さ 54cm 底長 28cm

小さい靴を履くのです。小さな足を飾るために、靴には刺繍で煌びやかな文様が施されました。靴底にも刺繍の装飾が施され、歩行のための実用品と言うよりは装飾・鑑賞としての側面が強いようです。歩行が困難になるくらい小さな足を強制的に作り出すことは現代では考えられないことですが、当時はおしゃれとしてもはやされました(図5)。

弓鞋は室内にすることが多い女性用の靴と言えます。では実際に実用品としてどのような靴を使っていたのかと言いますと、清朝を支配した女真族は北方を根拠地とする民族でしたので乗馬の機会が多く、利便性に優れたブーツが一般的で、朝服としても使われていました。乗馬の際に使用されるものなので、最低限の装飾は施されていてもシンプルな仕上がりになっています(図6)。

このように服飾は「実用品として」「装飾のため」「公的な身分を示す」など様々な側面を持っています。展覧会ではこの他にも、服飾作品が数多く展示される予定です。今回紹介したのは展覧会の見所のほんの一部です。続きは実際に展覧会をご覧になって、より一層中華の服飾芸術の素晴らしさを堪能していただければ幸いです。

(柿添康平/当館学芸員)

つきおかよしとし つきのひやくし  
**月岡芳年 月百姿 I・II・III**

普通展示  
 (浮世絵)

会期 ● I … 平成27年(2015)9月29日[火]～11月1日[日]  
 II … 平成27年(2015)11月3日[火・祝]～12月6日[日]  
 III … 平成27年(2015)12月8日[火]～平成28年(2016)1月17日[日]

幕末、明治に活躍した月岡芳年は緊張感あふれる描写や構図により今でも人気の高い浮世絵師のひとりです。「月百姿」は明治18年(1885)から25年(1892)にかけて制作された全100枚(目録等は除く)の大作で、月にちなんだ物語、詩歌などを題材としてさまざまな人物、幽霊、妖怪が描かれています。今回は全100枚を3期に分けてお楽しみいただきます。

- ①月岡芳年 「月百姿 朝野川晴雪月 孝女ちか子」 大判錦絵 明治18年(1885) 月百姿Iにて展示
- ②月岡芳年 「月百姿 五條橋の月」 大判錦絵 明治21年(1888) 月百姿IIにて展示
- ③月岡芳年 「月百姿 玉兔 孫悟空」 大判錦絵 明治22年(1889) 月百姿IIIにて展示



②



①



③

りょくゆう どうき  
**緑釉陶器**

普通展示  
 (東洋陶磁)

会期 ● 平成27年(2015)8月29日[土]～12月6日[日]

緑釉陶器とは、鉛または木灰を主な原料とする釉薬に、酸化銅を配合することで緑色にした陶器のことを言います。古くは中国・前漢時代において青銅器に代わる明器として流行しました。唐時代以降は、ひとつの器に褐色や藍色、緑色など複数の色釉をかけた三彩が登場し、その一色のみをかけた単色釉陶器として緑釉陶器が作られました。

器面を彩る色釉のなかでも緑釉に注目し、そのさまざまな表情をご紹介します。



りょくゆうかもんかわぶくろ  
 緑釉花文皮袋 遼時代・10世紀 高さ23.2cm

とう せいめい さんか  
**陶 一生命の讃歌**

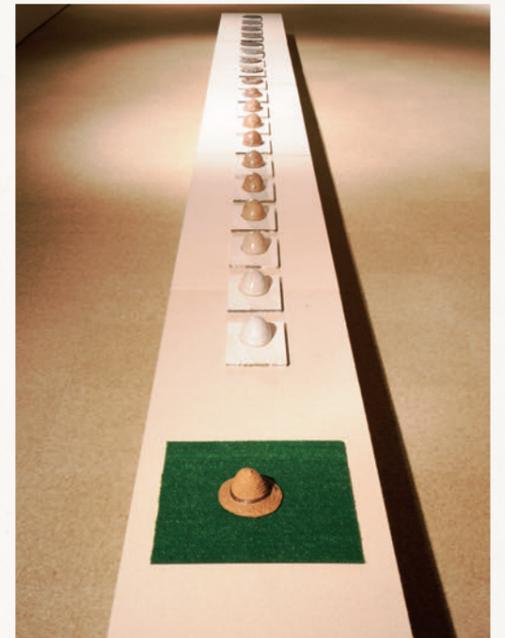
普通展示  
 (陶芸)

会期 ● 平成27年(2015)8月29日[土]～平成28年(2016)3月27日[日]

ものをつくるという行為には、有限の生を超えて永続する、無限の存在への祈りが込められています。とすれば、創造のいとなみとは、移ろいやすい日常の生の矛盾を深々と受け止めながら、ゆるぎない存在である精神の象徴へと具体化する、果てしない自己探究の過程といえるでしょう。

今回は、人間生命の矛盾の底流をなす生(エロス)と死(タナトス)という対称的な欲動を自己の内奥に見つめ、優雅な死の形相を夢想した十二代三輪休雪(1940年生まれ)の《古代の人・王墓/王妃墓》と、社会経済に起因する環境破壊を批判的に捉え、輝くばかりの生命の行く末に警鐘を鳴らした里中英人(1932～89年)の《赤ちゃんの帽子》を紹介し、変転する現実を見つめ直すなかで作家がかたどった、陶造形ならではの生命の讃歌をご覧ください。

里中英人 《赤ちゃんの帽子》 昭和48年(1973)



教育文化週間(平成27年11月1日[日]～7日[土])は、どなたでも普通展示を無料でご覧いただけます。  
 ※ただし、11月2日[月]の休館日は除きます。